

NY、マンハッタン。アッパーウエストの住宅街に佇むマンションに、彼女の住まいはあった。見晴らしは良いが、高級感に溢れていて特別、というほどでもない。日本人にとっては知る人ぞ知る有名人ではあっても、ここNYでは普通の一人の女性である。ベアテ・シロタ・ゴードン、84歳。第2次世界大戦終戦後、GHQのスタッフとして来日し、日本国憲法作成に関わった重要人物の一人だ。60年以上も改正されることのなかった憲法を実際に作った人が生きているのであれば話を聞いてみたい。その一心で、東京から私はここNYを訪れた。

2007年4月26日。取材は、ベアテさんの自宅にて。あまりに流暢に話す彼女の日本語に驚きながら、時に彼女のユーモアに笑いながら、インタビューはおおよそ5時間にわたって行われた。

* * * * *

「いらっしやい。日本から来てくださったの？ 光栄だね。あのね、何か飲みたかったらその冷蔵庫から取ってくださいね。お腹が空いてたらサンドイッチもあります。セルフサービスですけど(笑)」

歴史的な偉人との出会いは、こんな何気ない会話から始まった。彼女が日本で有名であるのは、条文で言えば『24条』、男女平等の文言を60年以上も前の憲法に入れ込んだことが大きい。でも彼女は決して法律のプロではない。ここアメリカでは、アジア・ソサエティのディレクターとして、アジアの舞台文化を広めた功績の方が名高い。父親が著名なピアニストでもあったことも大きかったのだろう。芸術や文化に精通していた。家のあちらこちらに、アーティストたちから寄贈された絵画や写真、彫刻などが飾られている。

彼女が東の果ての一国の憲法作成に関わったのは、他でもない日本に暮らす両親に再会するために終戦後戻ってきたからだ。そんなベアテ・シロタ・ゴードンと日本国憲法の“関係”が目されたのは、1993年に日本を再び訪れてからだ。その時初めて、この歴史的な物語について自由に話すことができたのだという。そもそも1970年代半ばまでは「トップシークレット」とされていた。憲法施行から25年以上の間である。

私が彼女を訪れた時期というのは、日本国内で憲法改正に向けての動きが日に日に高まっていた頃である。具体的に言えば、『国民投票法案』[★1]が国会で審議されていた。

「私は改憲することはとても危ないことのように思います」

彼女の答えはシンプルだった。そしてその意味するところは、彼女の作った条文へのこだわりではなく、平和を謳った『憲法9条』に起因している。

「いま改憲することは、“パンドラの箱”みたいなものだとは私は思っています。その箱を開けば何が出てくるのでしょうか。最初は、どこか別の条文を変えることを目的に改憲の動きが始まるでしょ？ 本当にその条文だけで済めばいいかもしれませんが、しかし、私はそうはならないような気がします。それを一旦開けてしまえば、何が出てくるかわからない。60年という



ベアテ・シロタ・ゴードンとの出会い “憲法”とは何であるかを考えた一日。

時間は、思っているよりも短い時間です。封建的な国から民主的な国になるのは時間がかかるものだと思います。私は結婚して60くらい経ちますが、夫は全然変わらない。私も変わらない(笑)。だから60年というものは、本当に長い時間じゃない。だから怖いのです」

改憲論議が沸き起こる時の“大義”は、たいていが決まっている。「もう60年も経ったのだから……」「アメリカ側から押し付けられたものではなく、今こそ自立した憲法を……」と。この頻繁に聞かれる『押し付け論』を簡単に言えば、「戦勝国として都合の良いように作ったものではないか」ということ。それが、軍事力の交戦権を放棄した『9条』に集約されていると考える人も多い。

「私たちが憲法を作ることになるとは、最初は誰も考えていなかったんです。マッカーサー將軍も“日本の政府が書きなさい”って命令したんですもの。私たちの何人かは法律の専門家ですが、大体はそうじゃない人たち。大学の先生、官僚、ビジネスマン……」

急遽、憲法を作成することになった彼女たちGHQに託された時間は、たったの9日間。焼け野原の東京をジープで駆け回り、図書館を探したという。世界中の憲法の資料を集めるためだ。ドイツのワイマル憲法、フランスの人権宣言、ソビエトやスカンジナビア諸国のものまで含まれていた。「ある国の憲法にだけ存在する条文や、他国の中に入っている違うニュアンスのもの。それを全部私たちは集めたんです。いろんな国から一番良い権利を。ある日本の専門家は“GHQが全世界の知恵を調べて、それを日本の憲法に入れたみたいだ”と言いました。だから、そこには全世界が一緒に書いたみたいに歴史の知恵が入っていると思っています

伊藤 剛

ます。『9条』に関しても、当初は“日本は攻撃、自衛共に軍隊はもてない”と書いてあったのです。でも、ケーディス大佐が“これでは自衛する権利さえ持てないではないか”と、『自衛』という文字を削除したのです」

ケーディス大佐。彼の存在は、日本人にとって馴染み深いものではない。日本の歴史教科書に登場するのは、飛行機の階段に足を乗せパイプをくわえるマッカーサー將軍のみだ。その直属の部下であったホイットニー准將がもっとも信頼を置いていたのが、このケーディス大佐である。ペアテさんいわく、実務上の統括者は彼だったのだという。

「マッカーサー將軍は、同じフロアというだけではなく、隣りの部屋でした。でも、將軍は天皇陛下みたいなものでした。私が会ったのはカクテルパーティでの一回と、ある日私がエレベーターに乗ろうとしている時に、彼が食事から戻ってロビーに帰って来た時くらい。その時、私は隠れましたけど(笑)。怖かったんです、とっても。でもケーディス大佐でさえ、マッカーサー將軍と直接話したのは実は二回だけなんです。私も驚きました。毎日会いに行くものとはばかり思っていましたから。その事実を知ったのもつい最近のことです。4年くらい前に。だから私が理解する限りでは、彼が占領の全体を統括していたのだと思います」

彼女自身から語られる当時の歴史は、日本側から語られる“占領”のイメージとは違う側面が見え隠れする。実際、彼女はその“憲法作成の9日間”の後は通常業務に戻り、以来『憲法』に関わることは二度となかった。彼女の人生にとっても、あまりに“特異”な時間だったのである。だからこそ、彼女の憲法観は一市民的な視点から外れることがない。

「どの国でも、今のところは法律がなければならいでしょう？ 何かしらまとめるルールがないと無茶苦茶になる。みんなが自分のことだけしてしまうから(笑)。でも憲法には、みんなのために一番良いことを表わすべきだと思います。私は全世界の憲法を改憲して『9条』を入れれば良いと思う。平和がもっとも重要なことだというのは、女性の心には自然と入っていることだと思います。それによってどうなるかは分かりません。でも、努力しなければならない。やってみないと駄目。だって、ガンジーとかいろいろな人たちが平和を目指したけれど、成功しなかった。でも『9条』は成功するかもしれないでしょ？ とりあえず60年間は日本のために成功したのだから。それは一つの成功事例です。日本は本当に誰も殺さなかったんですよ、この60年間」

彼女はいま、“憲法の母”として日本に招かれる機会が多くなった。自分の話せる範囲で、等身大に当時を振り返る。その人柄とユーモアによって、日本人の“憲法”というもののへの距離感は確実に変わることだろう。私自身もそうだったように。

けれどそんな彼女も来場者からされる質問に、時おり肩身を狭くする。「9条のことはどれだけのアメリカ人が知っているのですか？」。きっと彼女にとってこの憲法は、どこか遠くの国だけのものではないのだ。集めたのは世界の叡智であり、求めたのは世界中の男女平等であり、願うことは心の底からの平和。法律家ではない、一人の人間として。「私たちの世代は、第2次世界大戦の後には“平和になる”とみんな本当に思っていました。あまりに大変だった。“きっと

みんな分かっている。今度こそ平和に向けて。戦争はもうないはず”と。でもこの60年の間、全然平和じゃなかった。とてもたくさんの人が、また殺されてしまいました。今もまたイラクで。そして他の国でも…。この戦争がもっと続いて、イランでも始まってしまったら、それは全世界の終わりになると思う。今すぐ何か直さなければ、何かしなければ、このままでは20年で世界は終わってしまう。私は本当にそう思っています。その頃にはきっと私はもう生きてない。でも、あなたは生きている。そして私の孫が生きている。かわいそう。ただそれだけです」

憲法を作ったのが誰であれ、それがいつのことだったのであれ、今を生きる私たちに問われている“問い”は変わらない。この展覧会がアメリカと日本の双方にとって意義深いと思うのは、まさにそこにある。

伊藤剛:「GENERATION TIMES」編集長
URL:<http://www.GENERATIONTIMES.jp>

★1 『国民投票法案』…日本国憲法の改正は、国会議員の3分の2の賛成によって発議され、発議を受けて国民の過半数が賛成することによって成立する。国民投票法案は、この国民投票についての手続きを定めたもので、国会で審議後、2007年5月14日に成立した。



撮影:名和真紀子